

目的 前報では苧麻植物から繊維を採取し、その繊維を精練・漂白・染色し、更に撚をかけることにより、手工芸による利用度も広範囲に及びまた撚のかけ方、糸の太さにより種々の材質に利用出来ることが確認出来た。今回はより多く苧麻による特質が生かされる作品を作ることを目的として、染色による堅ろう度および摩擦に対する強さ、損傷度合について実験を行ったのでその結果を報告する。

方法 苧麻植物を前報の方法で採取し、市販の次亜塩素酸ナトリウム液を水100 mlに対し、3%を加え、精練すみの試料を15~30分常温で処理する。このとき時々攪拌して空気に入れさせ、その後温湯100 mlに対し、テオ硫酸ナトリウム0.1gを加えた液中で、5分間処理後、水洗を十分行なう。染色は麻の重量に対し、直接染料1~8%を15~20倍の水に入れ、更に炭酸ソーダ2~5%、食塩約少量を加えた染浴にし、この中に温湯で湿した苧麻を入れた後徐々に温度を上げて30~60分間沸騰させた後に取り出し、冷えてから水洗し、自然乾燥させる。この試料に撚りをかけ、木綿と同じ模様のごんを刺し、摩擦試験機とピリングテスターを併用して強さと損傷の度合について比較した。染色堅ろう度は、直射日光による方法を用いた。

結果 染色堅ろう度の、変退色は顕著な差が認められず、染着性が早い割には、染色堅ろう度が高かった。また室内では5年前に染色した試料と紙に密封した試料を肉眼で比較したが判別し難い程堅ろう度が高かった。摩擦に関しては木綿糸より苧麻糸が強く損傷が少ないことから摩擦のはげしいものや、ごん刺のぞうりの刺糸等に適するものと考えられる。